



Title	〔史料紹介〕『サント・アンタン学院がブラジルに所有する農園およびその収益に関する報告』に見る17世紀ブラジル北東部の砂糖農園
Author(s)	東, 明彦
Citation	ブラジル研究. 2009, 5, p. 87-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106453
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔史料紹介〕

『サント・アンタン学院がブラジルに所有する農園およびその収益に関する報告』に見る

17世紀ブラジル北東部の砂糖農園

東 明彦

はじめに

ブラジル植民地では1530年代に砂糖生産が始まり、その後、1570年代から1670年代にかけて、北東部地方の沿岸部を中心に、数多くの輸出向け砂糖農園が設立された。当時、大西洋の砂糖市場を支配していたのは、ブラジルの砂糖であった。ブラジルの砂糖生産はその後、17世紀後半以降始まったカリブ海地域での砂糖生産の影響もあり、何度か停滞の時期を経験するが、19世紀にいたるまで一貫して主要産業の地位を保持し、ブラジル社会に大きな影響を残した。

砂糖生産を行う大土地所有制農園においては、はじめは先住民、のちには多数のアフリカ人とその子孫が奴隷として使役された。砂糖生産は、サトウキビ栽培においても、製糖工場においても、多くの労働力を必要としたため、現地で調達できる労働力では不足し、外部から多数の移動労働者を導入する必要があった。¹

ブラジルの砂糖農園は、一般に「エンジェニョ(engenho)」と呼ばれた。「エンジェニョ」とは、元来、製糖工場を意味する言葉であるが、実際には製糖工場（「搾汁」「煮沸」「精製」「乾燥」「梱包」などの工程がある）のほか、サトウキビ畑や邸宅・住居を含む砂糖農園全体を包括する呼称として用いられた。

砂糖生産の特徴の一つは、農業部門と工業部門の連携が不可欠であった点である。サトウキビは、その含有する糖分を減少させないためには、伐採後できるかぎり早く搾汁し、加工する必要がある。

「サトウキビ栽培とそれを砂糖に変える (...) 工程との関係は、(...) 万事、非常に腐敗しやすいというこの作物に特有の性質に結びついていた。伐採と搾汁、煮詰めと結晶化は表裏一体となっていたから、農業部門と工業部門は連携を保って展開される必要があり、両部門の労働は並行して行われなければならなかった」のである。²

サトウキビは、目方が重く、容積が大きいので、運搬は容易でなかった。そのため、サトウキビ畑の近くで製糖を行う必要があり、初期の砂糖農園では、「100—500 エーカー」の広さでも、製糖工場を設置する必要があった。ただし、いったん砂糖に加工されると、その容積に対して価値が高く、水運・海運の利用を前提とすると、砂糖は、遠距離の取引に適していた。³

このように、砂糖生産には、肥沃な土壌や適切な気候条件のほか、継続的に重労働に従事する多数の労働力と製糖工場やその設備に投資する多額の資本が必要であった。

本稿では、以上の点を念頭に置いたうえで、17 世紀前半のブラジル北東部砂糖農園「エンジェニョ・セルジペ・ド・コンデ」に関する一史料を紹介し、当時の砂糖農園の特徴を考察することをその目的としている。

ブラジルの砂糖生産に関する詳細な史料としては、アンドレ・ジョアン・アントニル著『ブラジルの富』（リスボン、1711 年）(André João Antonil, *Cultura e opulência do Brasil por suas drogas e minas*, Lisboa, 1711) の第 1 部がよく知ら

れているが、同書が実際に執筆されたのは、ブラジルの砂糖生産が停滞期を迎えた 17 世紀末のことであった。⁴一方、以下に紹介する、司祭エステヴァン・ペレイラ著、『サント・アンタン学院がブラジルに所有する農園およびその収益に関する報告』は、執筆年代が 1635 年であり、砂糖生産勃興期、つまり、いわゆる「砂糖の時代」の同時代的な史料として貴重なものといえる。

1. 著者、および史料執筆の経緯

エステヴァン・ペレイラ司祭が著した『サント・アンタン学院がブラジルに所有する農園およびその収益に関する報告』（コインブラ、1635 年 8 月 23 日）は、当時イエズス会が所有していた、ブラジル北東部バイア湾岸地方の代表的な砂糖農園、「エンジェニョ・デ・セルジペ・ド・コンデ」⁵に関する記録である。オリジナルは、リスボンのトレ・デ・トンゴ国立文書館に所蔵されている。⁶

著者のペレイラ司祭は、ポルトガルのサン・ミゲル・ダス・マリニャスに 1589 年頃に生まれた。イエズス会の歴史家セラフィン・レイテによると、1614 年には、ポルトガルのブラガにあるイエズス会の学院で生活しており、そのとき 25 歳であったという。その後、アソレス諸島に滞在した後、1629 年から 1633 年まで、リスボンのサント・アンタン学院から派遣され、同学院がバイアに所有していた砂糖農園「エンジェニョ・デ・セルジペ・ド・コンデ」に経営管理者として滞在した。その後、ポルトガルに戻ったが、没年は不詳である。⁷

この報告は、単に農園の現状を記録することを目的として執筆されたわけではなかった。この報告は、ペレイラ司祭が、農園の経営・管理における自らの怠慢を後任者によって告発されたとき、それに対する弁明の書として執筆されたものであった。⁸つまり、1634 年 3 月、ペレイラ司祭の後任として農園に赴任したセヴァスティアン・ヴァス司祭は、前任者在任当時の農園経営がきわめて放漫であり、奴隷の統制は弛緩しており、サトウキビ栽培農民「ラヴラドール・デ・カナ」⁹との関係も陰悪で、農園は多額の負債を抱えて

いるとして、ペレイラ司祭をイエズス会サント・アンタン学院に告発した。ペレイラ司祭によるこの報告書は、それに対する弁明を意図して執筆された。

2. 報告の内容

報告は、セルジペ砂糖農園の現況（バイアから海路 30 レグアに位置するイリエウスにあるイエズス会所有のサンタ・アナ砂糖農園に関する記述を含む）と年間収支の概要とからなっている。

〔農園の現況〕

(a) セルジペ [セルジペ] の土地 [Terras em Cerecipe] (f. 1, p.348)

「サント・アンタン学院は、ブラジル総督領のバイア湾岸地方に、海岸に沿って幅 3.5 レグア、奥行き 4 レグアの土地を所有している。その土地はセズマリア¹⁰として譲与されたものである。（中略）この土地のうち、サトウキビの植え付けが行われているのは、（海ないしは舟が航行できる川沿いの土地で）サトウキビ栽培が可能な 1.5 レグア平方の土地である。残りはすべて、栽培に不向きな土地（マト）であり、食料作物の畑や牛の放牧場としてのみ使われている。サトウキビの栽培に適している土地のうち、[前所有者リニャーレス] 伯爵夫妻が存命中に、そのおよそ 4 分の 3 は売却された。売却を免れたのは 4 分の 1 だけで、その土地は現在も農園が所有している。」

1 レグアは、5,000 ないし 6,000 メートルに相当する距離の単位であり、1 レグア=6 キロメートルとして計算すると、学院は、500 平方キロメートルを超える土地を所有していたことになる。このうち、サトウキビ栽培に適する土地は、6 分の 1 弱の 80 平方キロメートルであり、残りは、食料作物の畑や牛の放牧場、森林などであった。

(b) [セルジペでのラヴラドール・デ・カナによる栽培地] [Partidos em Cerecipe] (f. 1-f. 1v., pp.348-349)

「売却を免れたサトウキビ栽培の適地は、今日そのすべてがすばらしいサ

トウキビ畑となっている。(中略) この土地は、一カ所にまとまった土地ではなく、10 ないし 12 の部分、つまり区画に分かれている。(中略) そしてそれから 12 の区画は、ラヴラドールたちに貸与されている。(中略)

海ないしは舟の航行が可能な川沿いにある土地については、毎年借地料として、その土地で収穫されるサトウキビから製糖され、ラヴラドールの取り分となる砂糖のうち、その 3 分の 1 が支払われる。(中略) このような借地を 3 分の 1 の借地と呼ぶのである。

そのほかに、4 分の 1 の借地もある。これは、借地料がラヴラドールの取り分となる砂糖の 4 分の 1 だけの場合である。海ないしは川の船着き場から遠い土地にある借地がこれにあたる。それらの土地は、船着き場までサトウキビを運ぶのにたいそう苦勞するという理由で借地料が安くなるのである。」

上述の史料にもあるように、広大な土地がすでに売却されているが、学院所有の耕地も、分割されて、小作に出されている。史料には、農園が直営する耕地に関する記述はなく、後述するようにこの点は、17 世紀初頭の砂糖農園の一つの特徴であった。

小作の形態としては、自分の取り分の 3 分の 1 を地代として支払う「パルティド・デ・テルセイロ」と、自分の取り分の 4 分の 1 を地代として支払う「パルティド・デ・クアルト」があった。

ラヴラドールが栽培したサトウキビから 600 アロバの砂糖が生産される場合を想定すると、製糖された砂糖のうち 300 アロバは製糖料として農園の取り分となり、残りの 300 アロバがラヴラドールと呼ばれた「サトウキビ栽培農民」の取り分となった。「パルティド・デ・テルセイロ」の場合、ラヴラドールは、自分の取り分 300 アロバの中から、100 アロバを小作料として農園へ支払った。

同じように、「パルティド・デ・クアルト」の場合には、上記の例では、ラヴラドールは、自分の取り分 300 アロバのうち 75 アロバを小作料として農園へ支払ったのである。

通例は、「パルティド・デ・テルセイロ」だったが、海港や河川から離れて

いる場合には、「パルティド・デ・クアルト」となった。つまり、収穫されたサトウキビの運搬が容易か否かは、耕地が肥沃か否かと同様、あるいはそれ以上に、耕地の価値を決定するきわめて重要な要素であった。¹¹

(c) [その他の収益、および売却地に付帯するサトウキビ供給義務（オブリガサン）] [Outras rendas e obrigações] (f. 2-f. 2v, pp.349-350)

「売却済みの土地からは、地代（エンフォロ）として、雌鶏が支払われ、その数はおよそ 50 羽になる。帳簿を見ると確かであるが、それらの土地が売却されたとき、その土地で栽培されるサトウキビはすべて永久にセレジペの製糖場（中略）で製糖することが義務づけられている。それで、ラヴラドールは、収穫の前に農園の管理人あるいは監督にセレジペの製糖場でサトウキビが必要かどうかを尋ねる義務があるのである。そのサトウキビが必要な場合には、ラヴラドールはそれを他の者に売却することはできない。」

「売却済みの土地からは、地代（エンフォロ[enforo das terras]）として、雌鶏が支払われ、その数はおよそ 50 羽になる。」とあるが、これは、農園と土地購入者〔農民〕との関係を示す象徴的な意味合いが強かった。つまり、土地売却の際、その土地で収穫されたサトウキビは、永久に[in perpetuum]にセレジペのエンジェニョ（製糖工場）で製糖する旨の義務が課されているが、このような関係の存在を象徴していたのが雌鶏での地代の支払いであった。史料のとおり、サトウキビ栽培農民は、収穫の前に、農園の管理者に対して、自分たちが収穫するサトウキビを農園が必要とするか否か問い合わせることが義務づけられていた。

(d) [セレジペのエンジェニョ] [Engenho de Ceregipe] (f. 3b, p.351)

「[セレジペの製糖場は、] ブラジルにある製糖場の中で最良かつ最も著名なものの一つである。その理由は、舟が航行できる多くの川が流れる広大なサトウキビ畑がその周囲に広がり、また [サトウキビ搾汁用の] 水車を動かすためのすばらしい用水路には水がたえることがないからである。（中略）さ

らには、[周辺の] パタティバ、アウエウペ、セレジペ地域の大部分のサトウキビが、この製糖場での製糖が義務づけられているからでもある。」

[セレジペでのラヴラドール・デ・カナによる栽培地] の項で述べたように、航行可能な、また水車を動かす動力となる水を供給する、豊富な水量をもつ河川に恵まれるということは、農園の価値を決める大きな要素であった。セルジペの農園が、40,000-50,000 クルザド（1 クルザードは、400 レイス）の価値があり、ブラジルで最良の、最も有名なエンジェニョの一つであるといわれた理由の一つはここにあった。

[農園の収支]

著者は、収穫に恵まれた年を想定し、農園の収支を計算している。著者が上げている数字は、特定の年の実際の数字ではなく、農園管理の経験から導き出された見込みの数字であった。

著者は、砂糖（精製糖）の価格としては、1 アロバ（約 14.7 キロ）につき、800 レイスから 1000 レイスを想定している。（ただし、1200 レイスに上昇することも、400-500 レイスに下落することもあると述べている。）(f.5v, p.354)そして、800 レイスという価格が、農園の収支が均衡する価格であるとしている。

著者によると、製糖工場では、製糖に使用する円錐形の容器 [= フォルマ (forma)] に換算して、7000 フォルマ分の砂糖が製造され、ラヴラドールと折半して、3500 フォルマ分の砂糖が製糖工場 (= 農園) の取り分となった。1 フォルマからは、精製糖 1 アロバと粗糖 0.5 アロバが製造されたので、精製糖(açúcar branco)については、3500 アロバ、粗糖(açúcar mascavado) については、1750 アロバが農園のものとなった。3500 フォルマ=3500 アロバの精製糖から得られる収入は、1 アロバ 800 レイスで計算すると、280 万レイスとなる。精製糖よりも品質の劣る粗糖は、おおむね 1 アロバ 360 レイスであったので、収入は 63 万アロバとなった。その他、さらに品質の劣る粗糖や現物での地代収入などを加えると、収入は、総計 387 万 4000 レイスとなった。(f. 5v-f.6,

pp.354-355)

一方、農園の支出は、330 万 8633 レイスと概算されている。(f.10, p.363) 内訳は、賃金(24%)、燃料(21%)、銅(11%)、船(11%)、工事(8%)、奴隷(10%)、その他(15%)となっている。¹²「賃金」は、農園の管理者や監督、製糖職人などに支払われる額であり、「燃料」は、薪などの購入、「銅」は、銅製釜の修理や購入に充てられた。「船」は、サトウキビや砂糖の輸送費であり、「工事」は、建物や道路の補修費であった。「奴隷」は、奴隷の購入費（農園では、死亡した奴隷の補充のため、奴隷 1 人当たり 3 万 5000 レイスで、毎年 5 人の奴隷を購入していた。なお、当時、農園には約 80 人の黒人奴隷がいた。¹³) や奴隷の食費・医療費等であった。「その他」には、清掃や水路・水車の補修費が含まれていた。

「奴隷」に係わる費用よりも、「賃金」に係わる費用が大きいことを考慮すると、17 世紀の砂糖農園が農園主と奴隷との二極構造として理解できる訳ではないことが分かる。つまり、「エンジェニョ」においてさえ、職人や技術者、専門職を中心に、賃金労働者としての「自由な労働者」の存在が相当大きかったのである。

また、「燃料」の費用が大きいことも注目に値する。17 世紀前半、エンジェニョ・セルジペ・ド・コンデや川の対岸のエンジェニョ・サン・ベント・ドス・ラジェスのように、周辺の開発が進み、森林資源が不足したため、「燃料」問題に直面していた「エンジェニョ」がすでに存在した。内陸のエンジェニョ・サン・カエタノのように、周辺に十分な薪の供給地があり、実質上「燃料」費用がわずかであった「エンジェニョ」もあったが、エンジェニョ・セルジペ・ド・コンデの場合には、17 世紀前半から「燃料」費用が支出の中で大きな割合を占めていたのである。環境問題との関連でも、沿岸部における森林枯渇の問題は重要である。¹⁴

収入から支出を差し引いた「収益」は、387 万 4000 レイス－330 万 8633 レイス＝56 万 5367 レイスとなる。フレデリック・モーロは、総資産を 4 万ないし 5 万クルザドと考えると、「収益」は「資本」の 3%前後 (2.8%－3.5%)

となり、税や利子の支払いを考慮すると、「エンジェニョは、いかなる、少なくとも算定できる収益を生み出さなかったのは、確かだ。」と述べている。¹⁵ただし、この点に関しては、収益率は、セズマリアとして下賜された土地の価値(総資産の約半分)を総資産から差し引いたうえで計算する必要があり、その場合には、収益率はモーロの計算のほぼ倍になり、けっして低くはなかったというシュウォーツの指摘も考慮に入れる必要がある。¹⁶

おわりに

ブラジルの砂糖農園は、前述のように、製糖工場や農園主・奴隷の住居、礼拝堂のほか、サトウキビ畑、牧場、森林などからなり、それら全体が「エンジェニョ」と呼ばれていたが、「エンジェニョ」が本来は製糖工場を意味することから分かるように、砂糖農園の中心はあくまでも製糖部門、つまり製糖工場であった。

ブラジルの砂糖農園を考えるうえで、注意すべき点の一つは、砂糖農園の通時的な変化を見逃すことである。例えば、17世紀の砂糖農園と18世紀、19世紀の砂糖農園の間には、共通点も多いが、いくつかの差異もある。そのような差異の中で最も重要な差異は、砂糖農園における労働の問題、特に「ラヴラドール・デ・カナ」と呼ばれたサトウキビ栽培農民の役割に関するものである。

本稿で取り上げた史料においては、「ラヴラドール・デ・カナ」について相当詳しい記述がある一方、砂糖農園の黒人奴隷によるサトウキビ栽培については何の言及もない。また、「農園の収入」の中心となる製糖に関する記述においては、生産した砂糖のすべてを「ラヴラドール・デ・カナ」と折半している。つまり、逆に言えば、製糖した砂糖のすべてを農園がその取り分とすべき「直営」のサトウキビ畑で栽培されたサトウキビはなかったことになる。

当時の砂糖農園は、製糖部門は農園の直営であったのに対し、サトウキビの栽培は、「ラヴラドール・デ・カナ」と呼ばれた「サトウキビ栽培農民」にその多くが委ねられていた。すでに述べたように、かれらは、土地所有者の

場合も、分益小作農の場合もあったが、いずれにせよ比較的少数の奴隷¹⁷を
使役する農民層であった。かれらの存在は、18-19 世紀のブラジル（あるいはカリブ海地域の）砂糖農園をもとにして描かれる砂糖農園像、つまり砂糖
農園主やその代理人が多数の黒人奴隷を酷使し、労働力を容赦なく消耗させ、
継続的な農作業を行わせるというイメージが、17 世紀のブラジル砂糖農園に
は、必ずしも適用することはできないことを示している。

セルジペ砂糖農園の場合は、17 世紀中葉にはサトウキビの供給をほぼ
100%「ラヴラドール・デ・カナ」に依存していた。このような状況は、17
世紀後半になると変化し始め、さらに 17 世紀末になると、製糖するサトウキ
ビの大半は、「エンジェニョ」の直営地で栽培したサトウキビになるが、それ
までの間は、サトウキビ栽培農民が比較的少数の奴隷を使役しながら、とき
には奴隷と肩を並べてサトウキビ栽培に従事し、そのサトウキビを製糖工場
に供給していたのである。¹⁸前述のように、1570 年-1670 年の時期は、ブラ
ジル史においていわゆる「砂糖の時代」と呼ばれ、ブラジル砂糖が大西洋の
砂糖市場を支配した時期であった。この時代は、砂糖生産の急速な拡大期に
当たったが、規模を拡大するための投資を製糖工場に集中するためには、自
前の奴隷でサトウキビ栽培にあたる「ラヴラドール・デ・カナ」の存在は、
「エンジェニョ」にとって不可欠の存在であったし、「ラヴラドール・デ・カ
ナ」にとっても、少ない資本で砂糖生産に参入するには、「ラヴラドール・デ・
カナ」の地位は好都合であった。このような両者の利害の一致は、17 世紀の
ブラジル砂糖農園に独特の状況をもたらすことになったのである。

注

¹ P. D. Curtin, "Plantations" in Alberto Vieira (ed.), *Slave with or without Sugar*, Funchal, CEHA, 1996, pp.41-58, p.43.

² シドニー・W・ミンツ著『甘さと権力』、川北稔・和田光弘訳、平凡社、1988 年、

³ Curtin, *op. cit.*, p.42.

⁴ アントニル研究の第一人者アンドレ・マンジュイ・ディニス・シヴァによると、『ブラジルの富』第1部は、最初独立した書物として執筆されたが、その後、17世紀末から18世紀初頭のブラジルの変動を目の当たりにした著者が計画を変更し、後に第2部以降が付け加えられた。

執筆の経緯は、次の通り。

(1)アントニルは、エンジェニョ・セルジペ・ド・コンデ農園に滞在後の1693-1698年の間に第1部にあたる部分を執筆。

(2)1704-1707年の間に、砂糖価格などを新しい史料で改訂。

(3)1707-1709年末の間に、第II部、第III部、第IV部、および献辞などを執筆。
André João Antonil, *Cultura e opulência do Brasil por suas drogas e minas, Introdução e comentário crítico por André Mansuy Diniz Silva*, 1ª. edição portuguesa (revista), Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 2001, p.38.

⁵ 以下、砂糖農園「エンジェニョ・デ・セルジペ・ド・コンデ」の略歴を記す。
本史料が著されたのは、農園の所有権に関する係争が行われていた時期に当たる。
1560年代第3代ブラジル総督メン・デ・サ(在任1557-1572)が設立。

1572年、メン・デ・サの死後、娘フェリパが相続。

(翌年、フェリパは、リニャーレス伯フェルナンド・デ・ノロニャと婚姻)

1618年、フェリパの死後、リスボンのイエズス会サント・アンタン学院、バイアのイエズス会学院、バイアのミゼリコルディア(信徒会)の間で、所有権に関する係争が起こる。(この間、事実上、リスボンのサント・アンタン学院が管理経営)

1655年、係争者間の和解により、農園の主要部は、リスボンのイエズス会サント・アンタン学院の所有に帰す。

1759年のイエズス会追放後、王室に没収される。

Stuart B. Schwartz, *Sugar Plantations in the Formation of Brazilian Society, 1550-1835*, Cambridge, 1985, pp.489-497.

⁶ 手稿は、10葉からなり、表裏に記入されている。

"Dase rezão da fazenda que o Collegio de Santo Antão tem no Brazil, e de seus rendimentos", A.N.T.T. –Cartório dos Jesuítas, maço 13, no. 20.

刊行本としては、次の文献に収録されている。本稿で引用する場合には、手稿のページ数と文献(2)のページ数を併記する。

(1)André João Antonil, *Cultura e Opulência do Brasil por suas Drogas e Minas, Texte de l'édition de 1711, traduction française et commentaire critique par André Mansuy*, Paris: Institut des Hautes Études de L'Amérique Latine, 1965, pp.513-527.

(2) André João Antonil, *Cultura e opulência do Brasil por suas drogas e minas, Introdução e comentário crítico por André Mansuy Diniz Silva*, 1ª. edição portuguesa (revista), Lisboa,

Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 2001, pp.348-364.

⁷ Serafim Leite, S. I., *História da Companhia de Jesus no Brasil*, t. IX, Rio de Janeiro: Instituto Nacional do Livro, 1949, p.39.

⁸ Schwartz, *Sugar Plantations ...*, p.229.

⁹ ラヴラドールは、「エンジェニョ」の製糖工場へサトウキビを供給するサトウキビ農民を指す言葉であり、ブラジルでは、初期のサトウキビ栽培において大きな役割を担った。北東部の事例では、各「エンジェニョ」には、多くの場合は、3-8 人のラヴラドールがいたが、その数が25 人以上に達する場合もあった。ラヴラドールには、土地の所有権を有する者もそうでない者もいた。ラヴラドールの中には、土地購入の際に、契約書に「エンジェニョ」の製糖工場へのサトウキビの供給義務が定められている者もいた。土地の所有権を持たない場合には、地代として、収穫の一定割合を現物で支払う分益農が多かった。

Stuart B. Schwartz, “Free Labor in a Slave Economy: the Lavradores de Cana of Colonial Bahia”, in Dauril Alden (ed.) *Colonial Roots of Modern Brazil*, Berkeley: University of California Press, 1973, pp.148-197, pp.180-181.

¹⁰ セズマリアとは、王室が植民者に下賜した分与地のことで、一定期間内にその土地を開発することが「分与」の条件であった。ただし、実際には、そのような条件は、しばしば無視された。

¹¹ 砂糖生産が成功するには、肥沃な土壌や適した気候のほか、水車（搾汁機）の利用やサトウキビ・砂糖の輸送のため、水資源利用の容易さが重要であったことは、各種の記録に繰り返し述べられている。17 世紀前半のエステヴァン・ペレイラ司祭の報告書や1711 年刊行のアントニル著『ブラジルの富』のほか、19 世紀前半ブラジル北東部に滞在したイギリス人ヘンリー・コスターも、以下のように、同様の記述をしているのは興味深い。

「第一級の砂糖農園の大部分は、富裕な人々が所有している（中略）。この等級に属すると言っている農園は、海岸の近く、つまり海岸から二ないし六マイルにある農園で、サトウキビの植え付けに適したかなり広い低地—また同じくかなりの広さの処女林—、さらに良質の牧草地をもち、（中略）水力や水路を利用できる農園である。海岸部は、内陸部よりも規則的な降雨に恵まれており、河川を利用して農園の生産物を市場へ運ぶのも容易である。これらは、〔農園が〕海の近くにあることの大きな利点である。」

Henry Koster, *Travels in Brazil*, London, 2nd ed., 1817, 2 vols., Vol.II, pp.156-157;
歴史学研究会編、『世界史史料 7 南北アメリカ 先住民の世界から一九世紀まで』、岩波書店、2008 年、p.284.

¹² Frédéric Mauro, *Nova História e Novo Mundo*, São Paulo: Editora Perspectiva, 3ª. ed. 1973, pp.136-138.

¹³ *Loc. cit.*

¹⁴ エンジェニョ・セルジペ・ド・コンデの場合、17世紀初頭にラヴラドールへ周辺の土地を売却したことが「燃料」を外部から大量に購入する契機となった。
Schwartz, *Sugar Plantations ...*, p.220, p.222.
川北稔「自然環境と歴史学—トータル・ヒストリーを求めて—」(『岩波講座世界歴史1 世界史へのアプローチ』、岩波書店、1998年、pp.109-131、pp.123-129) 参照。

¹⁵ Mauro, *Nova História ...*, p.138.

¹⁶ Schwartz, *Sugar Plantations ...*, p.228.

¹⁷ ラヴラドール・デ・カナが所有する奴隷数は、平均すると6-10名程度であった。
James Lockhart and Stuart B. Schwartz, *Early Latin America: A History of Colonial Spanish America and Brazil*, Cambridge: Cambridge University Press, 1983, p.209.

¹⁸ 「エンジェニョ・セルジペ・ド・コンデ」の砂糖生産

収穫年	「エンジェニョ」の 直営地		「ラヴラドール」の 保有地		全生産高 アロバ
	アロバ	比率(%)	アロバ	比率(%)	
1655/56	0	0	5138	100	5138
1669/70	2691	38	4404	62	7095
1680/81	3131	52	2842	48	5973
1699/1700	2062	84	380	16	2442
1704/05	4013	73	472	27	4485
1705/06	4707	83	998	17	5705
1707/08	2724	85	475	15	3199
1711/12	3732	61	2336	39	6068

(1 アロバ=約14.7キロ)

出典: Stuart B. Schwartz, "Free Labor ...", p.195.

参考文献

Antonil, André João, *Cultura e Opulência do Brasil por suas Drogas e Minas, Texte de l'édition de 1711, traduction française et commentaire critique par Andrée Mansuy*, Paris: Institut des Hautes Études de L'Amérique Latine, 1965.

Antonil, André João, *Cultura e opulência do Brasil por suas drogas e minas, Introdução e comentário crítico por Andrée Mansuy Diniz Silva*, 1ª. edição portuguesa (revista), Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 2001.

Curtin, P. D., “Plantations” in Alberto Vieira (ed.), *Slave with or without Sugar*, Funchal, CEHA, 1996, pp.41-58.

Koster, Henry, *Travels in Brazil*, London, 2nd ed., 1817, 2 vols., Vol.II.

Leite, Serafim, S. I., *História da Companhia de Jesus no Brasil*, t. IX, Rio de Janeiro: Instituto Nacional do Livro, 1949.

Lockhart, James; Schwartz, Stuart B., *Early Latin America: A History of Colonial Spanish America and Brazil*, Cambridge: Cambridge University Press, 1983.

Mauro, Frédéric, *Nova História e Novo Mundo*, São Paulo: Editora Perspectiva, 3ª. ed. 1973.

Pereira, Estêvão, “Dase rezão da fazenda que o Collegio de Santo Antão tem no Brazil, e de seus rendimentos”, A.N.T.T. —Cartório dos Jesuitas, maio 13, no. 20.

Schwartz, Stuart B., “Free Labor in a Slave Economy: the Lavradores de Cana of Colonial Bahia”, in Dauril Alden (ed.) *Colonial Roots of Modern Brazil*, Berkeley: University of California Press, 1973, pp.148-197.

Schwartz, Stuart B., *Sugar Plantations in the Formation of Brazilian Society, 1550-1835*, Cambridge, 1985.

東明彦「ブラジル植民地時代の奴隷制砂糖プランテーションにおける砂糖キビ栽培者『ラヴラドール・デ・カナ』について」『ポルトガル・ブラジル語学科創立10周年記念論集』（大阪外国語大学、1989年）、pp.45-59.

川北稔「自然環境と歴史学—トータル・ヒストリーを求めて—」（『岩波講座世界歴史1 世界史へのアプローチ』、岩波書店、1998年、pp.109-131）.

ミンツ、シドニー・W、『甘さと権力』、川北稔・和田光弘訳、平凡社、1988年.

歴史学研究会編、『世界史史料7 南北アメリカ 先住民の世界から一九世紀まで』、岩波書店、2008年.